

【研究論文】

初・中級レベルの日本語教育で 教える程度副詞

— とても・大変・非常に・すごく・ひどく・本当に —

片山 きよみ・舩井 雅子

要 旨

初・中級の日本語教科書で取り上げられている副詞の中から、「とても」「すごく」「ひどく」「非常に」「大変」「本当に」の異同について検証する。これらの副詞は状態性の意味を持つ語に係って、その属性の程度が大きいことを示すという共通した意味を持つが、用法の違いははっきり示されていない。

本稿では、まず、日本語教科書に見られる程度副詞を概観し、その中で最も使用頻度の高い「とても」について、「程度性のスケール」という観点からその特徴を見る。次に「とても」との比較を軸に、「すごく」「ひどく」「非常に」「大変」との異同を探る。さらに、「とても」「非常に」「大変」のように従来から程度副詞と言われているものと、「周縁的・過渡的な」程度副詞である「本当に」との異同を検証することによって、幅広い視点からの程度副詞の分析を試みる。

用例の比較検討によって、それぞれの副詞には口語的か文章語的か、改まった表現かくだけた表現か、主観的か客観的かという対立に加え、種々の構文（否定文、比較構文、命令文、直接的な感謝やお詫びの表現など）における使用制限に違いがあることを明らかにする。

1. はじめに

日本語を教える際に気になることの一つに、動詞や形容詞（い形容詞・な形容詞）に比べて、副詞の扱いが軽すぎるのではないかということがある。

日本語を第二言語として学ぶ学生にとって、まず越えなければならぬハードルとして動詞や形容詞の語彙と活用がある。そのことを考えれば、特に初級のレベルでは文の必須要素となることの少ない副詞にあまり重きを置かない（あるいは置けない）、というのは道理にかなっていることかもしれない。

しかし例えば、ほとんどの初級教科書で比較的早い時期に導入される程度

副詞「とても」は、練習でも繰り返し使う機会があり、当然学生の定着も早いと考えられている。ところが、半年なり一年なりの日本語のコースを終えた学生から、「とてもありがとうございました」と挨拶されると、日本語を教えた責任ある者としては、「ちょっと待って」と言わないわけにはいかない。「とても=very」と覚えた学生が、「とてもありがとうございました」というのは無理からぬことではあり、「大変ありがとうございました」との違いを教えていない我々教授者側に問題があると言わざるを得ない。

また、大きな荷物を抱えて「ずいぶん大きいですね」という場面の会話⁽¹⁾を練習したばかりの初級レベルの学生が、「昨日食べた料理はずいぶんおいしかったです」と報告するのを聞き、ちょっと変だと感じながら十分に説明できなかったことがある。このようなとき、何がどうおかしいのか時間をかけて丁寧に説明できればいいのだが、時間の余裕がなかったり、的確な説明ができるだけの知識を持たなかったりという理由で、結局聞き流してしまうことも少なくない。

初級で出現する程度副詞に限って言えば、「とても」「ずいぶん」のほかに「かなり」も十分に定着しているとは言えない。さらに、中級レベルでは出現する程度副詞も格段に増えるが、それらの微妙な違いまで教えることがほとんどないために、語彙は増えただけで十分に使いこなせないという学生も多い。

本稿で程度副詞を取り上げたのは以上のような動機に基づくものであるが、教科書に出現する全ての程度副詞を取り上げることは難しいので、ここでは、程度が大きいことを表す「とても」「すごく」「大変」「非常に」「ひどく」の五つの副詞と、「広義の程度副詞」⁽²⁾といわれる「本当に」も併せて考察を試みる。本来は程度副詞ではない「本当に」をここで取り上げるのは、程度副詞と同様の程度修飾機能を持つ用法で教科書（初級・中級とも）に多く現れ、「とても」「大変」との違いも見られるため、これらの違いを明らかにする必要を感じるからである。

2. 日本語教科書に見られる程度副詞

程度副詞は、「状態性の意味を持つ語にかかって、その程度を限定する副詞」（国語学大事典）とされるが、どのような語をその範疇に含めるか、またそれらをどう分類するかについては、研究者によって違いがある。ここでは程度副詞の概観を見るために、先行研究など⁽³⁾を参考にして、まず、状態

そのものの程度を表すもの（A類）と、いわゆる比較構文で他の状態との程度差をあらわすもの（B類）に分け、各々程度が大であるものから順に並べて示す。

[A類]

〈程度大〉まったく、だんぜん、絶対、すっかり、非常に、大変（に）、とても

↑ 大いに、ごく、きわめて、実に、たいそう、すごく、ひどく⁽⁴⁾

↑ かなり、ずいぶん、そうとう、だいぶ、よほど

↑ なかなか

〈程度小〉少し、ちょっと

[B類]

〈程度大〉最も、はるかに

↑ ずっと、いっそう、ますます、一段と

↑ さらに、なお、けっこう

↑ もっと

↑ 少し、ちょっと、むしろ、やや

〈程度小〉少しだけ、ちょっとだけ、ほとんど

このように数多くある程度副詞であるが、日本語教育の現場で使用される教科書に出現するものは限られており、上の分類のうち多く使われる程度副詞を調べてみると、初級用・中級用⁽⁴⁾共にほとんどがA類のものであり、B類に属するものはわずかであることが分かる。

それでは、初級教科書、中級教科書各々に見られる程度副詞のうち、程度が大きいことを表すものは具体的にどのようなものがあるか、下にその程度順に並べて示す。ちなみに、先に述べたように本来は程度副詞ではない「本当に」は、「広義程度副詞」として用いられる場合があるが、従来の程度副詞であるA類やB類と程度修飾の機能に違いがあると考えられる（詳しくは第6章で考察する）ので、ここではC類として区別して並べた。

〈初級教科書〉

[A類] すごく、とても

かなり、ずいぶん

- なかなか
[B類] ずっと
けっこう
[C類] 本当に

〈中級教科書〉 [()内の数字は、出現回数を示す]

- [A類] ものすごく⁽⁶⁾ (1)、非常に (12)、ひどく (2)、すごく (10)
大いに (1)、ごく (2)、きわめて (1)、実に (1)
大変 (13)、とても (28)
かなり (15)、ずいぶん (26)、だいぶ (5)
なかなか (5)
[B類] ずっと (9)
けっこう (10)
[C類] 本当に (19)

初級・中級共に最も多用されている「とても」は、ほとんどの場合、初級で形容詞を導入する際に、「とてもおおきい」「あまりおおきくない」という対比の形で教える。「とても=very」、「あまり=not so」と覚えれば、何の問題もなく使えるはずだと思えるのだが、先に挙げたような誤用が生まれることを考慮すれば、「大変」「本当に」「非常に」「すごく」などとの正しい使い分けが出来るように、各々の微妙な異同のある段階できちんと教える必要があると言える。

「かなり」「ずいぶん」(fairly, quite などと英語訳されるもの)のように、「とても」などより少し程度が低いことを表すものも中級では多く見られ、これらの異同も確認する必要があるが、本稿では扱わない。

3. 「とても」の用法

初級、中級の日本語教科書に最も多く出現する「とても」について、その特徴を明らかにすることから始める。「とても」は「非常に」「大変」などと並び程度が大きいことを表す程度副詞である。話し言葉にも書き言葉にも幅広く使われ、現代口語において最も使用頻度が高い程度副詞の一つであると言えよう。本章では、「とても」と係り先の語との共起関係、及び「とても」が使われにくい構文を分析することによって、「とても」の特徴を見ていく。

3. 1 係り先の語との共起関係

程度副詞は状態性の意味を持つ語にかかると言われていたが、具体的にはどのような語を修飾するのだろうか。係り先の語を品詞別に見ておこう。

- ①形容詞（い形容詞、な形容詞）を修飾する用法（とても難しい、とても静か、とてもおもしろい本、とてもにぎやかな人）
- ②副詞を修飾する用法（とてもゆっくり歩く、とてもたくさん食べる）
- ③名詞を修飾する用法（とても美人、とても大人、とても田舎）
- ④動詞を修飾する用法（とても困る、とても喜ぶ、とても似ている）

状態や属性を表す形容詞は、「とても」と共起しやすい。ほとんどの初級教科書では、比較的早い段階で形容詞の導入に伴って「とても」を取り上げる。

- (1) ペキンは今寒いですか。
はい、とても寒いです。(みんな⁶⁾)
- (2) 日本語の勉強はどうですか。
とてもおもしろいです。(語学留学生)

初、中級で学ぶ形容詞はほとんど「とても」と共起すると言ってよいだろう。しかし、すべての形容詞が「とても」と共起するわけではない。「*とても同じ」「*とても新しい先生」（新しく赴任した先生の意）などとは言えず、程度を表すスケールが内在する語でなければ、「とても」と共起することはできない。また意味的に「程度が大きい」ということと矛盾する語とも共起しない（「とても小高い丘」）。⁷⁾

また、「とてもゆっくり歩く」「とてもたくさん食べる」のような副詞や「とても早く起きる」のような形容詞の連用形とも共起する。

名詞については、「*彼はとても学生だ」とは言えないが、「彼はとても大人だ」「ここはとても田舎だ」というような表現は可能である。『副詞の意味と用法』の説明を借りれば、「名詞の中でも性質や状態を表す意味を持つものや、名詞の【性質的】な面が強調されると程度副詞と結びつくことがある」ということになる。中級教科書には、「水はとても変わり者なんだ」（J501）の用例が見られた。

さらに、「とても」は一般的に状態性の動詞とも共起すると言われている。状態性の動詞にはどのようなものがあるのだろうか。

①状態性の動詞

動詞に係る教科書中の「とても」の用例には、心的な状態を表す動詞が多い。つまり、感情や感覚を表す動詞は「とても」と共起しやすいと言える。

- (3) 毎日10時まで働くので、とても疲れます。(SFJ)
- (4) おじさんはとても喜んで、持っていたりんごをくれた。(SFJ)
- (5) 国の母は地震をととても心配しています。(語学留学生)
- (6) 私は、とても困っちゃって。(中級・会話)
- (7) 京都はその時一晩だけ泊まりましたけど、とても気に入りました。(中級・会話)
- (8) わたしはとてもびっくりしました。(J501)
- (9) 両親はとても嘆いている。(J501)

中級になると、次のような状態動詞と共起する用例も見られる。

- (10) 日本で結婚式をあげるのはとてもお金がかかるそうですね。(J501)
- (11) 笑顔がとても似合う。(中級・読み物)

しかし、状態性の動詞はすべて「とても」と共起するのだろうか。

- (12) ?この答はとても違う。

「この答は全然違う」のように、本来、否定形と呼応する「全然」を用いた文のほうが自然なことから、ここでは「答が正解か、正解ではないか」という二極的なとらえ方がされていると考えられる。このような二極的な観点からは、「答がとても違う」は違和感がある。状態性の動詞が「とても」と共起する場合には、形容詞の場合と同様に状態性の中に程度性がなければならぬ。従って、「違い」に程度性のスケールがある「あの双子は顔は似ているが性格はとても違う」のような文は適格文となる。

また、近年の先行研究⁽⁶⁾では、程度副詞と質や状態の変化を表す主体変化

動詞との共起関係が明らかにされてきた。主体変化動詞とは、「温まる、冷える、汚れる、濁る、上がる、下がる、伸びる、縮む」などのように主体の状態が変化する動詞である。変化が徐々に進展していく動詞は、その変化の進展状況に程度性があるため「とても」との共起が可能である。主体変化動詞でも、「死ぬ」「割れる」のように変化が瞬時に起こる動詞は「とても」と共起しない。

- (13) 体がとても温まった。
- (14) セーターがとても縮んだ。
- (15) *彼がとても死んだ。
- (16) *コップがとても割れた。

しかし、主体の変化が進展的な動詞がすべて「とても」と共起するわけではない。その進展性に限界がある動詞は、程度が大きいことを表す副詞とは共起しないことが佐野（1998）によって指摘されている。

- (17) *お湯がとても沸いた。
- (18) *風邪がとても治った。
- (19) *葉っぱがとても枯れた。

- (20) ?私はとても病気になったんです。（日本語学習者の発話）

主体の変化が限界まで行き着いてしまった「沸く」「治る」「枯れる」などの動詞にはもはや程度性はなく、そのため「とても」とは共起しない。「とても病気になった」が許容しがたいと感じるのは、「病気になる」もこのような限界がある動詞だからだと考えれば説明できる。一方「とても元気になった」が自然なのは「元気になる」には限界がないからだと言えるだろう。

②動作性の動詞

動作動詞は「とても」とは共起しないと言われているが、次のような用例では許容度が上がると思われる。同じ動詞でも含意される意味によって「とても」との共起関係が変わる点にも注意しておきたい。

- (21) ?日本人はとても働く。(この場合「日本人はよく働く」が自然な文)
(22) 今日はとても働いた。
(23) ?赤ちゃんがとても泣いている。(赤ちゃんが「ひどく泣いている」であれば自然)
(24) あの映画はラストシーンでとても泣いた。

過去形を用いた(22)(24)は「とても」と共起してもあまり違和感を覚えない。(22)は「働く」という行為そのものではなく、働いたあとの状態、例えば疲労感、達成感などに焦点があり、(24)では「泣く」という行為より、とても悲しかったという感情のほうに焦点があるためだろう。

「とても」とそれぞれの品詞の語との共起関係について見てきて、形容詞や副詞だけではなく、名詞や動詞でも、状態性があり程度を表すスケールが内在していれば、「とても」と共起することが分かった。主体の状態変化を表す動詞については、進展性のある限界のない動詞に限られる。また、動作動詞でも文脈によって「動き」以外に焦点がある場合には「とても」との共起に関して許容度が上がる場合がある。

3. 2 「とても」が使えない構文

「とても」と係り先の語の共起関係について見てきたが、共起関係が十分でも、「とても」が使えない場合がある。次に、構文的に「とても」が使えない場合について見ていきたい。

①否定文

程度副詞「とても」は否定文では使えない。「とても」は、「とても食べられない」のように否定文で使われると、「どんなにしても～ない」という意味を表す。「とても無理」「とても駄目」などは否定文ではないが、語彙的には否定であり、程度副詞とは見なされない。「あまり」「全然」「少しも」などが文末の否定と対応する。

- (25) *とてもきれいじゃない。
(26) [あまり/全然/少しも] きれいじゃない。
(27) *とても困らない。

(28) [あまり／全然／少しも] 困らない。

②比較構文

第2章でA類(状態そのものの程度を表すもの)に分類した副詞でも、「中国は日本よりかなり物価が安い」「去年よりずいぶん大きくなった」のように比較構文で使えるものもあるが、「とても」のように程度が極めて大きいことを表す副詞は比較構文中で使うと不自然である。程度差が大きいことを表す場合には、B類(他の状態との程度差を表すもの)の「ずっと」「はるかに」などが使われる。

(29) *太郎は次郎よりとても背が高い。

(30) 太郎は次郎より [ずっと／はるかに] 背が高い。

(31) *今度の台風はこの前のよりとても大きかった。

(32) 今度の台風はこの前のより [ずっと／はるかに] 大きかった。

③命令・依頼・勧誘・意志などを表す文

「とても」は、命令、依頼、勧誘、意志などを表す文では使えない。「とても楽しんだ」とは言えるが、次のような言い方はできない。「大いに」「うんと」「存分に」のような量的な副詞とは共起する。

(33) *とても楽しんでください。

(34) [大いに／存分に／うんと] 楽しんでください。

(35) *とても楽しみませんか。

(36) [大いに／存分に] 楽しみませんか。

(37) *とても楽しもう。

(38) [大いに／存分に／うんと] 楽しもう。

工藤(1983)は「程度副詞の多くは、命令、依頼、勧誘、決意(意志)など、聞き手や話し手自らに向かって、ことがらの実現を“はたらきかける”叙法とは共起しないか、しにくい」と述べている。⁹⁾ これまで見てきた程度性のスケールという観点からは、それぞれの人が持つ程度性のスケールはそれぞれ異なっており、自分の尺度で他者に対して働きかけることができないためだと考えられないだろうか。また、森田(1977)は、「*先様のとてもお

好きなものをお選びください」のような文を例示し、「話し手の未知の事柄や未来の事柄には「とても」は使えない」と言うが、これもまた、未知の事柄や未来の事柄には話者のスケールが使えないことの表れだと言えるだろう。

④直接的な感謝、お詫び、ねぎらいの言葉

- (39) *とてもありがとうございます。
- (40) *とても申し訳ありません。
- (41) *とてもお疲れさま。

「とても」は直接的な感謝やお詫びの言葉、ねぎらいの言葉とは共起しにくい。一般的に程度副詞はこれらの表現では使いにくいとされているが、「大変ありがとうございました」とは言える。程度副詞間で許容度に違いが見られる点については第5章で検討したい。

「とても」は平叙文では使いやすいが、否定文、比較構文、あるいは命令、依頼、勧誘、意志などを表す文では、その使用が制限される。係り先の語との共起関係だけでなく、文末表現によっても制限されることが多い。次章以降ではこのような特徴を持つ「とても」の用例との比較を通して、「すごく」「ひどく」「非常に」「大変」、さらに「本当に」との異同について検証していく。

4. 「すごく」「ひどく」

「すごく」「ひどく」はともに形容詞「すごい」「ひどい」から転じたもので、「とても」と同様に程度が甚だしいことを表す副詞として使われている。ここでは、「すごく」「ひどく」の特徴を明らかにし、「とても」との異同を見る。

4. 1 「すごく」「ひどく」の用法

「すごく」は日常会話で多用され、最近では若い世代を中心に、形容詞形をそのまま副詞的に用いた「すごい」や強調形としての「ものすごく」の使用も多い。教科書では「すごく」が中心だが、新しい会話の教科書には「すごい」「ものすごく」の用例も見られる。

- (42) 実験ですごく忙しいんです。(SFJ)
(43) リサさんがいっしょだったので、鈴木さんはすごくうれしそうだった。(SFJ)
(44) 大雨よ。雨がすごく降ってるのよ。(中級・会話)
(45) すごい混んでるね。(生中継)
(46) 今、花火見てるんだけど、すごいきれいだよ。(生中継)
(47) 予習や宿題にものすごく時間がかかって。(中級・会話)

「ひどく」の用例を一例あげておく。

- (48) ひどく悲しいことがあったりして…(中級・読み物)

「すごく」は、話者の感情や感覚を直接表すときや眼前の出来事を描写するときに使われることが多く、この点では「とても」が使われる場面とほぼ一致する。しかし、「とても」よりくだけた印象を与えるため、改まった場面での使用は違和感がある。

形容詞「すごい」は、古語(「すごし」)では、「ぞっとするほど恐ろしい」、「ぞっとするほど物寂しい」という意味であったものが、現代語では「形容しがたいほどすばらしい」というプラスの意味でも使われるようになった(森田(1977)等)。形容詞から転じて副詞的に使われるようになった「すごく」は、プラス評価の語ともマイナス評価の語とも共起する。

すごくきれい／すごくおいしい／すごく働き者／すごく喜んだ／すごく温まった
すごくきたない／すごくまずい／すごく怠け者／すごく困った／すごく冷えた

一方、「ひどく」は「ひどくまずい」「ひどく顔色が青い」「ひどくサービスが悪い」のようにマイナス評価の語との共起することが多いが、一概にプラス評価の語と共起しないとは言えない。プラス評価の語とはどのような場面で共起するのだろうか。

- (49) これ、[*ひどく／とても／すごく]おいしいね。
(50) (プレゼントをもらって)うわあ、[*ひどく／とても／すごく]う

れしい。

話し手の気持ちを聞き手に向かって直接表現するときは、プラス評価の語とは共起しない。しかし、次のように客体化された文脈なら許容度が上がる。

- (51) 久しぶりに食べる母の手料理はどれもひどくおいしかった。
(52) 彼女はひどくうれしがっていました。

また、マイナス評価の語と共起する場合も、聞き手に対して話者の感情を直接表現するような場面では、「ひどく」は使いにくいようである。話者の感情を聞き手に対して直接表す「とても」や「すごく」に対して、「ひどく」は、客体化された場面で使われる事が多いと言えるだろう。

- (53) あなたがそんなこと言うなんて、[?ひどく／とても／すごく] 悲しい。
(54) 彼にそんなことを言われて [ひどく／とても／すごく] 悲しかった。

次に「とても」との相違点をいくつか見ておこう。「すごく」「ひどく」は、「とても」と比べて動作動詞と共起しやすい。

- (55) 今日はなんだかすごく寝た。
(56) 久しぶりにすごく話し、すごく笑い、すごく飲んだ、おかげですごく酔っばらってしまいました。

「すごく」は程度が甚だしいことを表すだけでなく、量が多いことも表す。「すごく飲んだ」は「飲んだ量」が多いことを、「すごく寝た」は「寝た時間」が長いことを意味する。

- (57) 車をひどくぶつけた。

「ひどく」も「すごく」と同様に動作動詞と共起することがあるが、量的な意味ではなく、「ひどく殴った」「ひどく泣いた」のように動作の激しさの程度を表すことが多い。「とても」を初めとする程度副詞は、元来実質的な

意味を持たず、程度のみを表す。⁽¹⁰⁾ 従って、「とてもたくさん飲んだ」⁽¹¹⁾ とか「とても激しくぶつけた」のように何らかの状態や量を表す語が必要であるのだが、「すごく」や「ひどく」には量や激しさが含意されることがあり、これらの語がなくても直接動作動詞と共起できる。

また、「とても」は他の程度副詞と共起しにくい、「すごく」「ひどく」を用いると許容できる場合がある。

(58) 彼はそうとう [すごく／ひどく／*とても] 困っている。

(59) かなり [すごく／ひどく／*とても] 渋滞している。

比較構文でも、「とても」に比べ「すごく」「ひどく」のほうが許容度が高いようである。

(60) 妹より私のほうが [すごく／ひどく／*とても] 叱られた。

(61) 今年の試験は去年より [すごく／ひどく／*とても] 難しかった。

比較構文や、他の副詞との共起という点では、「すごく」や「ひどく」は「とても」より共起制限がゆるやかであると言えるだろう。

命令、依頼、勧誘、意思などを表す文では、「とても」と同様に「すごく」「ひどく」は使われない。また、直接的な感謝、お詫びの言葉とも共起しにくいという特徴を持つ。

4. 2 「とても」「すごく」「ひどく」の異同

「すごく」「ひどく」は動作動詞や他の副詞との共起、比較構文中での使用など、「とても」よりも使用制限が緩やかである。このことは「すごく」「ひどく」が本来の形容詞の副詞的な用法から程度副詞への過渡期にあることの表れとみることができるだろう。

「すごく」は話者の気持ちを直接伝えるくだけた場面で多用され、プラス評価、マイナス評価どちらの語とも共起する。改まった場面でなければ「とても」と置き換えやすいが、「すごく」は「とても」より自由に使われる傾向があり、「とても」を「すごく」に置き換えることはできても、「すごく」を「とても」と置き換えることができない場面が出てくることは留意しておきたい。

一方、「ひどく」はマイナス評価の語と共起することが多く、特に「ひどく」がプラス評価の語と共起するためにはより客体化された文脈を必要とする。「ひどく」には、本来の形容詞の意味がかなり残っており、「とても」との置き換えに関しては語彙的、場面的な制限が大きい。

5. 「非常に」「大変」

「とても」「非常に」「大変」は、程度が大きいことを表す副詞としてひとまとまりにして扱われることが多く、その異同についてはあまり論じられていない。確かに、「非常に」「大変」は、係り先の語との共起関係、否定文、比較構文、あるいは命令、依頼、勧誘、意志などを表す文ではその使用が制限されるという点では、「とても」と同様の特徴を示すことが多い。しかし、実際の運用においては明らかな使い分けが見られる。これらの違いは何によるものだろうか。

5. 1 「非常に」「大変」の用法

「非常に」は「とても」「すごく」などと違い、文章語的であり、改まった会話で使われることが多い。初級教科書にはほとんど見られず、中級教科書で始めて導入される語彙である。

- (62) 彼は非常に話し好きな人だ。(J501)
- (63) タテマエとホンネを知り分けなければならない日本人との付き合いは、非常に疲れるし、非常にわずらわしい。(中級・読み物)
- (64) みんなの意見を一致させるのに、非常に時間がかかった。(J301)

上の用例の「非常に」はすべて「とても」と置き換えることができるが、ニュースや論文など非常に客観的な文では「とても」より「非常に」のほうが好まれる。一方、「とても」は話者の主観的な考えを表しているという印象を受ける。

- (65) 新潟県川口町では震度7の非常に激しい揺れを観測した。
- (66) とても激しい揺れを感じました。

「大変」は初級教科書では、「この仕事は大変です」「それは大変ですね」

のような形容詞として初出するが、副詞としての用法が見られるのは中級になってからである。教科書の用例を見ていくと、「とても」と違い、一人称で話者の心的状態を直接表すものは少ない。

- (67) 健一君はこれから(中略) 大変疲れて帰宅することが多いかと思
います。(会話中級)
- (68) 「…まだ十二時、と言わなければいけない」と言って、大変怒った
という。(中級・読み物)

次のような会話表現では、「とても」は「すごく」と言い換えることができるが、「ひどく」「非常に」「大変」では不自然である。「とても」や「すごく」が話者の直接的な気持ちの表現に使われるのに対して、「非常に」「大変」「ひどく」は客体化された場面で使われることが多い。

- (69) うわあ、これ欲しかったの。[とても/すごく/*ひどく/*非常
に/*大変]うれしい。
- (70) 前から欲しがっていたCDをもらって娘は[とても/すごく/ひ
どく/非常に/大変]喜んだ。

また、「大変」は話し言葉でも書き言葉でも、聞き手に対する丁寧さを意識した場面で用いられることが多い。

- (71) 住宅の設計やデザインに大変興味を持っています。⁽¹²⁾ (生中継)
- (72) 大変ご迷惑をおかけいたしました、申し訳ありませんでした。
(生中継)
- (73) いろいろ聞いておいたのが、大変役に立っています。⁽¹³⁾
(中級・読み物)

(71)(73)の「大変」は「とても」や「非常に」で言い換えることができるが、「大変」を用いるとより丁寧な印象を受ける。また、(72)のようなお詫びの表現では「大変」が好まれる。ここではお礼、お詫び、ねぎらいの表現における「とても」「非常に」「大変」の用法の違いを見ておこう。

- (74) 先日は、[*とても/*非常に/大変] ありがとうございます。
- (75) [*とても/?非常に/大変] 申し訳ありませんでした。
- (76) [*とても/*非常に/*大変] ありがとう。
- (77) [*とても/*非常に/*大変] ごめん。
- (78) [とても/非常に/大変] 感謝しています。
- (79) [とても/非常に/大変] ご迷惑をおかけしました。
- (80) [*とても/*非常に/大変] お疲れさまでした。

「大変ありがとう」「大変ごめん」が許容しがたいと感じるのは、「大変」のもつ丁寧さと「ありがとう」や「ごめん」のカジュアルさが相容れないためだと思われる。「本当にありがとう」「ほんとごめん」のように「本当に」の方が自然である。お詫びの表現では「非常に申し訳ありませんでした」のように「非常に」が許容されることもあるが、丁寧さが要求される場面では「大変」の使用が圧倒的に多い。

5. 2 「とても」「非常に」「大変」の異同

これまで見てきたように、口語表現である「とても」に対して、「非常に」「大変」は文章語として使われることが多く、話し言葉での使用は改まった場面に限られる。

森下(2004)は、「とても」は、聞き手の存否に関係なく話し手主体の感情を発露する、「表出」というムード性を持った語であり、一方、「非常に」や「大変」は聞き手を意識した発話であるといい、「対人性」という観点を示している。

話者の気持ちの直接的な表現には「とても」が、聞き手を意識し、聞き手に対して客観的に伝えたいときは「非常に」が、一方、目上の人やお客に対して丁寧さを出したいときは「大変」が好んで使われる。

「ありがとう」や「申し訳ありません」など定型となった感謝やお詫びの言葉は「とても」と馴染まない。「とても感謝しています」や「とてもご迷惑をおかけしました」など、動詞文で感謝やお詫びの気持を伝える場合には、「とても」の使用が可能である。これらの文は話者の気持ちを表すという「とても」の用法にかなっているが、定型表現には程度性を表すスケールがないために「とても」は使えないと考えられる。「とても」が使いにくいこれらの表現で「大変」が多用されているのは何故だろう。「丁寧さ」という意味合

いを担った「大変」は、同じようにこれらの定型表現で多用される「本当」と共通の機能を持つことが考えられる。

6. 「本当(に)」

「本当(に)」は本来、提示された情報に対してその事実が確かであることを認定する意味で用いられる副詞⁽⁴⁴⁾である。工藤(1983)は、形容詞のいわゆる連用形(すごく、ひどくなど)や他の副詞(特に、本当に、実に)などが、「形容詞と組み合わせさせてその程度を限定する用法に立つ」ことがあるとし、それらを「程度副詞の周位的・過渡的なもの」と呼んでいる。

「本当に」が本来の認定的意味で使われる場合と、「周位的・過渡的な」程度副詞(あるいは「広義の程度副詞」として使われる場合、どのような違いが見られるだろうか。日本語教科書に現れる用例を基に検証してみる。

- (81) きょうは本当にごちそうさまでした。 (SFJ)
- (82) 本当にありがとうございました。 (SFJ)
- (83) 吉田先生は本当にきびしい先生です。 (SFJ)
- (84) 切符が3枚売れて本当によかった。 (SFJ)
- (85) 外国人にはカタカナ語は本当に難しいですね。(語学留学生)
- (86) 日本は食べ物が高いでしょう?
ええ、本当に高いですね。 (みんな)
- (87) 本当に助かりました。 (みんな)
- (88) 仕事は本当におもしろかった。 (J501)
- (89) 本当に彼は頭が固い。 (J501)
- (90) 僕は本当におどろいた。 (J501)
- (91) 本当に申し訳ございません。 (生中継)
- (92) 本当に日本のためになっているのだろうか。 (J501)

上の用例の中で、明らかに事実認定の機能を持つと判断できるのは(92)だけで、(83)(85)(86)(88)(89)はどちらの意味にも解釈できる、あるいはどちらの意味も含まれると解釈できる。それ以外は程度副詞としての用例で、その全てが「ごちそうさま」「ありがとう」「申し訳ございません」「よかった」「助かりました」など聞き手に対して直接自分の心情を伝える表現に係っている。

川端(1999)は、「本当に」が認定的意味で解釈される場合の条件として、

- ①話し手の疑問を表す表現と共起する場合
- ②不確実を表す文末表現と共起する場合
- ③仮定条件と共起する場合

の三つを挙げ、話し手が否定的な前提を持っている場合や、発話時点で話し手にとって対象となる事態そのものが未体験であるか、事態の成立結果が未知であり、真偽が不明のものである場合であるとしているが、この考察は首肯できるものである。

この考えに従えば、先に述べたとおり、認定的意味の「本当に」は(92)だけののだが、例えば「(83)吉田先生は本当にきびしい先生です。」の場合、話し手の学生が以前先輩から「吉田先生はきびしい」と聞いたことがあったが、自分が習ってみて「確かにきびしいと思った」ということを伝える文だとすれば、「本当に」は事実認定の意味で解釈されるし、その厳しさを実感したことを強調する機能も併せ持っているとも言える。このように認定的意味と程度を強調する機能のどちらも含んでいる「本当に」は、日本語教科書に多く見られるだけでなく、日本語を母語とする我々の日常会話においても普通に使われている。しかし上に述べたように、聞き手に対して直接自分の真情を伝える表現(ありがとう、申し訳ない、良かった等)に係っている場合には、事実認定の意味はない。

それでは、事実認定の意味を持たない「広義の程度副詞」としての「本当に」と、「とても」を初めとする従来からの程度副詞には、程度修飾のしかたにどのような違いがあるのだろうか。

6. 1 「本当に」と「とても」

これまでの考察から、最も典型的な程度副詞は「とても」であると言える。ここではまず、「とても」と「広義の程度副詞」である「本当に」との異同を検証する。

6. 1. 1 形容詞、副詞、名詞、動詞を修飾する用法

- (93) ベキンは今寒いですか。
はい、[本当に／とても] 寒いです。
- (94) 日本語の勉強はどうですか。

はい、[本当に／とても] おもしろいです。

- (95) [本当に／とても] たくさん食べる。
(96) 水は [本当に／とても] 変わり者なんだ。
(97) そんなこと言うなんて彼は [本当に／とても] 子供だね。
(98) 毎日10時まで働くので、[本当に／とても] 疲れます。
(99) おじさんは [本当に／とても] 喜んで、持っていたりんごをくれた。
(100) 国の母は地震を [本当に／とても] 心配しています。

第3章で見た形容詞、副詞、名詞、感情や感覚を表す動詞を修飾する「とても」は、ほとんど「本当に」と入れ換え可能である。しかし、状態動詞を修飾する次の2例の場合には若干違いが見られる。

- (101) 日本で結婚式を挙げるのは、[?本当に／とても] お金がかかるそうですね。
(102) 笑顔が [本当に／とても] 似合う。

「日本で結婚式を挙げるのは、本当にお金がかかるそうですね。」が許容度が落ちると感じられるのは、「発話時点で話し手にとって対象となる事態そのものが未体験である」ことを示す「～そうですね」という文末表現によって、「本当に」は本来の認定的意味に解釈され、程度修飾の働きを持たなくなるからと考えられる。⁽¹⁵⁾ これは状態動詞に係る場合に限らず、例えば形容詞や副詞、感情動詞に係る場合も同様に、文末が次のように変われば程度副詞としての機能はなくなる。

- (103) 本当に寒いのでしょうか。
(104) 本当にたくさん食べましたか。
(105) 国の母は地震を本当に心配しているかもしれない。

第3章で考察した主体変化動詞や動作動詞の場合も、文末表現の制限によって認定的意味に解釈されない限り、「本当に」は「とても」と同様の共起関係があると言える。

また、「とても死んだ」(用例15)、「とても治った」(同18)は非文であるが、「とても」を「本当に」に換えた場合は、本来の認定的意味に解釈すれば違

和感のない文といえるが、程度副詞の意味では「とても」の場合と同様に非文となる。

つまり、「死ぬ」「治る」のように変化の進展状況に程度性がない動詞の場合は、「とても」と同様に、程度副詞としての「本当に」は共起しないと見える。

- (106) 体が [本当に／とても] 温まった。
- (107) 体が [?本当に／とても] 温まっただろうか。
- (108) 彼が [?本当に／*とても] 死んだ。
- (109) 風邪が [?本当に／*とても] 治った。
- (110) 今日は [本当に／とても] 働いた。
- (111) 今日は [?本当に／とても] 働いたかもしれない。

6. 1. 2

3. 2で、「とても」は否定文や比較構文などには使えないことが分かったが、ここでは、この点について「本当に」と違いがあるかどうかを検証する。

① 否定文

- (112) [?本当に／*とても] きれいじゃない。
- (113) [??本当に／*とても] 困らない。

「本当にきれいじゃない」の場合は認定的意味ではもちろん使えるが、程度副詞としても許容されるようである。これに対し、「本当に困らない」では程度副詞としての解釈がしにくい。この違いは何によるのだろうか。

「困らない」というのは話し手が「困る」という経験をしていないことを述べている。従って、「話し手が未体験の事態を述べる場合の「本当に」は認定的意味に解釈される」(42頁)という事例に該当する。一方、「きれいじゃない」というのは話し手が見た客観的状況を叙述した文であり、体験に基づいた文であるために「本当に」が程度副詞として解釈されうると考えられる。同じように、次のような場合も「本当に」と否定文が共起する。

(114) 彼は本当に勉強が好きじゃないですね。

(115) あのレストランは本当においしくない。

つまり、「とても」は否定文では使えないが、「本当に」は形容詞文の場合には共起すると言える。

②比較構文

比較構文では「とても」は使えず、B類の「ずっと」「はるかに」などが使われことを述べた(第3章)が、「本当に」の場合は、比較構文で使っても非文とは言えない。その理由は、「とても」は程度が大きいことを表すのに対して、「本当に」は「話し手の直接体験による実感に基づ」(川端1999)いて、「対象の属性を強調するが、情報の程度性を具体化することにはならない」(同)ために、比較構文中で使っても許容度がゼロにはならないのだと考えられる。⁽¹⁶⁾

つまり、程度を指定する典型的な程度副詞である「とても」は、比較構文にはなじまないが、「本当に」の程度副詞としての機能は強調であることから、比較構文でも使用できるということということである。

(116) 太郎は次郎より [?本当に/ *とても/ ずっと/ はるかに/ かなり]
背が高い。

(117) 今度の台風は前のより [?本当に/ *とても/ ずっと/ はるかに]
大きかった。

③命令・依頼・勧誘・意志などをあらわす文

「本当に」が程度副詞として機能するのは「話し手の実体験に基づく」場合に限るという前提からすれば、これらの文が「本当に」と共起し得ないことは明らかである。理由は異なるが、これらの文と共起しないという点では「とても」と同様である。

(118) [*本当に/ *とても] 楽しんでください。

(119) [*本当に/ *とても] 楽しみませんか。

(120) [*本当に/ *とても] 楽しもう。

④直接的な感謝やお詫びの言葉、ねぎらいの言葉

「とても」はこれらの表現とは共起しないが、「本当に」は共起しやすく、この点は「大変」と共通している。このことから、「大変」と「本当に」は、程度を指定する「とても」と異なり、強調の機能に重点があると考えられる。

(121) [本当に／*とても／大変] ありがとうございます。

(122) [本当に／*とても／大変] 申し訳ありません。

(123) [本当に／*とても／大変] ご苦労さまでした。

6. 1. 3 「本当に」「とても」の異同

程度副詞として機能する場合の「本当に」は、話者の実感に基づいて感情を直接的に表出する点で、「とても」と似ていると言える。従って、形容詞、副詞、名詞、動詞（状態性の動詞、限界のない主体変化動詞、一部の動作動詞）との共起関係は「とても」とほとんど同様である。命令・依頼・勧誘・意志などを表す文で使えないことも共通している。

異なる点としては、「とても」が否定文や比較構文で使えないのに対して、「本当に」は形容詞の否定文に限っては使えること、比較構文でも許容度がゼロではないことが挙げられる。さらに「とても」と違って、直接的な感謝やお詫びの言葉、ねぎらいの言葉と共起しやすいというのは、「本当に」の最も顕著な特徴として挙げられるが、これは「とても」と「本当に」の機能の違いによると考えられる。

6. 2 「本当に」「非常に」「大変」

第5章で、「非常に」は改まった場面で客観的に伝えたいときに用いられ、「大変」は目上の人やお客などの相手に対する丁寧さを出したいときに使われることを検証したが、ここでは、この二つの程度副詞と「本当に」の違いを見ていく。

(124) 彼は [本当に／非常に／大変] 話し好きな人だ。

(125) タテマエとホンネを知り分けなければならない日本人との付き合いは、[本当に／非常に／大変] 疲れるし、[本当に／非常に／大変] わずらわしい。

(126) みんなの意見を一致させるのに、[本当に／非常に／大変] 時間が

かかった。

上の用例では、「本当に」「非常に」「大変」のどれも使えるが、「非常に」は文章語的で改まった印象があり、「大変」は丁寧な感じを与える。この二つの言葉に比べると、「本当に」は話し手の実感に基づくという基本的な性格があるため、「非常に」と違って主観的な印象を与え、「大変」のような丁寧な感じもない。

- (127) 新潟県川口町では震度7の[*本当に/?とても/非常に/大変] 激しい揺れを観測した。
- (128) そのとき[本当に/とても/非常に/大変] 激しい揺れを感じました。
- (129) わあ、これ欲しかったの。[本当に/とても/*非常に/*大変] うれしい。
- (130) 前から欲しがっていたCDをもらって、娘は[本当に/とても/非常に/大変] 喜んだ。

前章で、ニュースや論文などの客観的な文章では「非常に」が最も適すると述べたが、「とても」や「大変」が使えないというわけではない。しかし、「本当に」は、このような客観的文章には馴染まない。逆に、話者の感情を直接的に表現する場合は、「本当に」は「とても」と同様に適しているが、「非常に」や「大変」は不適である。また、話者の体験を客観的に少し改まった文章で表現する場合(128)(130)には、ここで取り上げた「本当に」「とても」「非常に」「大変」は全て使用可能である。

次に、「会話文でも、書き言葉でも、聞き手の存在を意識した場合に用いられる傾向がある」(5. 2)という「大変」の特徴が、「本当に」にも見られるかどうか検証する。

- (131) (私は)住宅の設計やデザインに[*本当に/大変] 興味を持っています。
- (132) [本当に/大変] ご迷惑をおかけいたしまして、申し訳ありませんでした。

(133) いろいろ聞いておいたのが、[本当に／大変] 役に立っています。

かなり改まった文(131)では「本当に」は馴染まないが、直接的なお詫びやお礼の表現では、次のように改まった文でもくだけた文でも使えることが分かる。

(134) 先日は[本当に／大変／*とても／*非常に] ありがとうございます。
ました。

(135) [本当に／大変／*とても/?非常に] 申し訳ありませんでした。

(136) [本当に／*大変／*とても／*非常に] ありがとう。

(137) [本当に／*大変／*とても／*非常に] ごめん。

(138) [本当に／大変／とても／非常に] ありがたい。

6. 3 程度副詞としての「本当に」の特徴

本来、提示された情報が確かに事実であることを認定する意味で用いられてきた「本当に」が、認定した事実を強調して伝える機能を併せ持つようになり、現在では、「広義の程度副詞」「周位的・過渡的な程度副詞」等と呼ばれている。

程度副詞としての「本当に」は、話し手にとって既知の事実、実際の体験に基づいた実感を伝えるという基本的な性格があるため、主観的な印象を与える。したがって、「非常に」を使うような改まった客観的な文章には馴染まない。直接的なお詫びやお礼の表現に多用される点は「大変」と共通しているが、「大変」は丁寧な文でしか使えないのに対し、「本当に」は改まった文でもくだけた文でも使える。

また、「とても」と共通する使い方も多いが、「とても」が使えない否定文や比較構文で使えるケースもあり、「本当に」が使える文脈の許容範囲は、「とても」に比べてかなり広い。これは、「とても」が程度副詞本来の機能である「程度指定」に限定して用いられるのに対して、「本当に」の機能は強調であるため、従来の程度副詞の使用制限をこえた様々な場面で使うことができるからだと考えられる。

7. 「とても」「すごく」「ひどく」「非常に」「大変」「本当に」の異同

3章から6章まで、六つの程度副詞の特徴を検証してきたが、各々の語の

異同を考える際に注目すべき特徴として、まず、主に用いられるのが話し言葉であるかそれとも文章語であるかという点が挙げられる。次に、改まった文脈で用いられるか、くだけた文脈で用いられるかという違い、さらに、語彙の特徴として主観的か、客観的かという点も注目される。

使用可能な構文と使用できない構文についても、各々の語に違いがあることが明らかになった。このような本稿で取り上げた程度副詞の異同をまとめて表したのが、次の表1である。

表1 〈程度副詞の異同〉

	とても	すごく	ひどく	非常に	大変	本当に
1. 話し言葉	○	○	○	△	○	○
2. 文章語	○	×	×	○	○	△
3. 改まった場面	×	×	○	○	○	○
4. くだけた場面	○	○	○	×	×	○
5. 主観的	○	○	○	×	×	○
6. 客観的	×	×	○	○	○	×
7. 否定文	×	×	×	×	×	△
8. 比較構文	×	△	△	△	△	○
9. 依頼・命令等の文	×	×	×	×	×	×
10. 感謝・ねぎらいの文	×	×	×	×	○	○
11. お詫びの文	×	×	×	△	○	○

○は該当するもの、あるいは使える場合を、×は該当しないもの、あるいは使えない場合を、△はある条件の下で使えることを表す。

表からまず分かることは、従来からの程度副詞として最も使用頻度が高いと考えられる「とても」の使用制限がかなり厳しく、「周辺的・過渡的」程度副詞と称される「本当に」が、最も許容範囲が広く、使用制限が緩やかだということである。本来形容詞であり、それが副詞として使用されるようになった「大変」「ひどく」も、使用制限は比較的緩やかである。

「程度を限定する」という程度副詞本来の働きは、話し手が自分の持つ評価のスケールに基づいていることを考えれば、かなり主観的なものであり、評価性を含んでいるといえる。従って、比較構文、感謝やお詫びを表す定型的な文などに使うことができない「とても」は、最も典型的な程度副詞であ

る。それに対して、本来の用法から転じて程度副詞として使用されるようになった「本当に」「大変」「すごく」などは、「程度を限定する」働きに限らず、「量」の概念を含んだり、「強調」する用法で使用する場合も多く、「周辺の・過渡的」であるが故に、緩やかに使われていると考えられる。

最後に、表1に示せなかった各々の語の特徴を下に挙げる。

とても	話者の感情や感覚を直接的に表現する、最も典型的な程度副詞である。使用制限は厳しいが、多用される。
すごく	形容詞「すごい」からの転用。プラス評価でもマイナス評価でも使うことができる。
ひどく	形容詞「ひどい」からの転用。主観的な話し言葉ではマイナス評価の場合に使われるが、客体化された文章の中では、プラス評価の意味で使われることもある。
非常に	客観的な改まった文脈でしか使われない。
大変	形容詞「大変な」からの転用。聞き手を意識して丁寧さを出したいときに使われる。副詞としての主な機能は、程度の「指定」と同時に「強調」にもある。
本当に	事実認定の副詞「本当に」からの転用。程度副詞としての主な機能は、程度の「指定」より「強調」にある。使用制限は最も緩いが、「大変」のような丁寧さはない。

8. おわりに

初級、中級の日本語学習者に教える程度副詞の中から、程度が大きいことを表す副詞、「とても」「すごく」「ひどく」「非常に」「大変」「本当に」の異同について見てきた。これらは使用頻度が高く馴染み深い副詞であるが故に、日本語教育の現場で見過ごされることが多かった。本稿では、これらの程度副詞の用法の違いを明らかにすることが目的であった。

程度が大きいことを表す副詞は主観を投影しやすいと言われており、時代の流れと共に刻々と変化しつつある。「とても」や「非常に」のようにその地位を確立したもの、あるいは「本当に」のように過渡期にあるものなど様々である。

それぞれの副詞の用例を比較検討することによって、これらの副詞には語彙的にも構文的にも様々の使用制限があること、また典型的な程度副詞ほど使用制限が強く、周辺の・過渡的なものほど使用制限が緩やかであるという

傾向を見た。このことが周辺の・過渡的な程度副詞を使いやすくしており、多用される一因になっているとも言えるだろう。

このように、程度副詞の使い分けにはいくつもの要因が絡んでおり、学習者のレベルに応じた、また、機に応じた指導が必要であると思われる。

注

- (1) 当大学留学生センター研修コースで使用されている「SFJ」第5課MC (Model Conversation) にこの表現があり、「ずいぶん」の意味は [quite, very] とある。
- (2) 川端(1999)は、「本当に」「実に」などの副詞が「相対的な状態性の意味を持った語句を修飾して、程度副詞と同様の機能を持つことがある」と指摘し、これらの副詞を「広義程度副詞」としている。またこれより先にこのような副詞に着目した工藤(1983)は、従来からの程度副詞に対し、「程度副詞の周辺の・過渡的なもの」であるとしている。
- (3) 工藤(1983)、「日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法」(国立国語研究所)
- (4) 「すごく」「ひどく」は、形容詞「すごい」「ひどい」の連用形であるとして、副詞の範疇に含めない場合もあるが、工藤(1983)は、「非常に」「大変」等と同様にこの2語も「ほぼ程度副詞に移行しおえたと思われるもの」としており、本稿もこれに従った。
- (5) 初級教科書は「SFJ」「語学留学生の日本語」(本稿での略は「語学留学生」)「みんなの日本語」(同「みんな」)の3冊を調べた。「とても」「かなり」「ずいぶん」の3語は新出語彙として3教科書とも取り上げている。「なかなか」については、「なかなか～ない」の形ではどの教科書も取り上げているが、程度副詞としては「SFJ」に1例見られただけである。「すごく」「けっこう」も用例があったのは「SFJ」だけである。
中級教科書として今回調べたのは、「日本語会話中級」(同「会話中級」)「J301」「J501」「中級の日本語」(会話の単元からの引用は「中級・会話」、読み物の単元からの引用は「中級・読み物」)「日本語を楽しく読む本・中上級」(同「楽しく」)「日本語生中継」(同「生中継」)の6冊である。
初級の場合は出現する語が非常に限られているが、中級の場合は語彙の数が増え、その出現頻度に差があるので、()に各々の出現回数を示した。
- (6) 参考文献には「ものすごく」を分類に含めたものはなかったが、「すごく」の強調形として実際に使われているので、本稿ではA類の程度副詞として扱っている。
- (7) 丹保健一(1981)
- (8) 森山卓郎(1986)、佐野由紀子(1998)
- (9) 現状より程度が増加することを表す副詞には、命令、依頼、勧誘、意思を表す文末

- 表現と共起するものがあり（「もう少し早く歩いてください」「もっと早く歩こう」など）、すべての程度副詞が使えないわけではない。
- (10)程度副詞が実質的な概念を持たないことは、「は」「も」などで取り立てたてられないこと、「だ・です」を伴って述語にたたないこと（「*それはとてもだ」）、修飾語を受けないことなどによって説明される。ただし、「すこし」「ちょっと」などの数量名詞性を持つものは除く。（工藤（1983）参照）
- (11)「とても飲んだ」も「たくさん飲んだ」という量的な意味で許容できるという話者もいる。
- (12)就職試験の面接の場面での発話。
- (13)留学生が国にいる日本人の友人に宛てた手紙文の一部。
- (14)新明解辞典には副詞「本当に」の説明として「言葉の真実の意味においてそうであることを表す」とある。
- (15)これは「本当に〈お金がかかる〉そうですね」と解釈するからであって、「〈本当にお金がかかる〉そうですね」と解釈する場合は、程度強調になる。以下の例の場合も同様のことが言える。）
- (16)川端（1999）は程度副詞について「文脈上で明示されている基準や、一般常識として『普通の程度』と目されるものを基準として、対象となる事態の相対的な位置関係をはかるもの」と述べ、「アンケートの評価段階として程度副詞が用いられるのは、この特性によるもの」と指摘している。それに対して、スケール全体の中での相対的な位置づけをしない「本当に」は、認定した属性を強調するだけであるという。アンケートの評価段階に「本当に」が使われないことを考えれば、この指摘は納得できるものである。

参考文献

- 浅野百合子（1984）「程度副詞の分析—ずいぶん・だいぶ・なかなか・相当・かなり—」『日本語教育』52 p.47-54
- 川端元子（1999）「広義程度副詞の程度修飾機能—「本当に」「実に」を例に—」『日本語教育』101 p.51-59
- 川端元子（2000）「聞き手への行為要求表現と程度副詞」『名古屋大学国語国文学』p.78-64
- 工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 p.176-198
- 佐野由紀子（1998）「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3 p.7-22
- 丹保健一（1981）「程度副詞と文末表現—「ひじょうに」を中心に—」『金沢大学言語文学研究』2 p.22-30
- 島郁、西原鈴子、中田智子、中道真木男（1991）『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』国立国語研究所
- 森下嗣子（2004）「程度副詞「とても」の肯定用法—「表出」について」『同志社女子

大学大学院文学研究科紀要」4

森田良行（1977）『基礎日本語1』角川書店

森山卓郎（1986）「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20 p.60-65

渡辺実（2002）「程度副詞の体系」『国語意味論』塙書房 p.298-313

渡辺実（2001）『さすが、日本語！』ちくま書房

参考にした教科書

『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』（1991）筑波ランゲージグループ
凡人社

『初級 語学留学生のための日本語』（2002）凡人社

『みんなの日本語 初級』（1998）スリーエーネットワーク

『日本語中級J30101—基礎から中級へ』（1995）スリーエーネットワーク

『日本語中級J50101—中級から上級へ』（1999）スリーエーネットワーク

『Intermediate Japanese 中級の日本語』（1994）ジャパントイムズ

『日本語を楽しく読む本・中上級』（1993）産能短期大学国際交流センター

『日本語会話中級 I』（1993）凡人社

『日本語生中継 中・上級編』（2004）くろしお出版